

# 「目」と eye による視覚表現

嶋 田 裕 司

Reference to Eyes in Japanese and English

Hiroshi SHIMADA

## 1. はじめに

視覚に関する表現について考えるとき最初に思い浮かぶのは、「見る」「見える」あるいは look, see などの動詞を中心とする表現であろう。確かに、動詞は文の構造や意味について論じる際に注目されることが多い。しかしながら、動詞ほど目立つことはないけれども、名詞である「目」と eye によっても、視覚について表現できることを忘れてはならない。小論では、日本語と英語の視覚に関わる表現のうち、名詞「目」と eye を用いたものについて考える。問題は、次ぎの二つに分けることができる。第一に、見ることを表わすとき、「目」と eye はどのように用いられるのか、二つの言語で全く同じように概念化されているのか。第二に、もし何らかの相違があるとすれば、それは何によってもたらされるのか。

ここでは、これらの問いに対する答えを順に探し求めてゆく。次ぎの二つの節で、「目」と eye の概念化が日本語と英語で部分的に重なり合っていることを記述する。注目することを表わす際には、両言語において、目は空間の中を動き回り、対象に接触するものとして扱われている。しかし、知覚を表わす際には、日本語と英語では相違があらわれる。日本語では目が物の到着点となるのに対して、英語ではこのような概念化は生じないと思われる。それでは、なぜこのような差異があるのか。最後の節では、その答えが解釈の順序にあるという考えを提示する。

## 2. 目が物に触れる

英語で、物に注目することを表現するためには、look, watch などの動詞を用いることもあれば、名詞 eye を用いることもある。たとえば、Mary looked at me. あるいは She watched me carefully. などは動詞による言い方であり、Fix your eyes on the road and we'll be much safer. (LDPV) あるいは She's lovely. I can't take my eyes off her. (ODCI) は名詞 eye に依存した表現である。人が物を見る行為は、いくつかの要素に分けて表現される。人物と動作とその対象の三つの部分に分ければ、She watched me. のようになる。さらに動作の部分から目を際立たせて、名詞 eye を表出すれば、She fixed her eyes on me. のように言うことができる。従来、視覚表現について論じる際には、主に look, see などの動詞が話題になっていたが、ここでは、名詞 eye を用いた表現について考える。

名詞 eye が用いられると、目は対象に接触するものとして表現される。実際には物理的に接触していないことを知りながら、話者は見ることを、目が物に触れることとして表現する。出来事における参与者役割の用語を用いれば、目は主題 (theme) であり、見る対象は場所 (location) であり、見ることは目がある場所に物理的に接触することである。<sup>1</sup> このことは、物の所在を表わす文 (1a) と同じように、目の所在を表わす文 (1b) を解釈するということである。

(1) a. Your meal is already on the table. LDPV

## b. Nicola's eyes were on her father,.... WB

(1a) は、食物が食卓に物理的に接触していることを前置詞 on が表わしている。同様に、(1b) は、Nicola の目が彼女の父に接触していることを表わしている。ただし、実際には、目が物理的に物に接触するのではなく、目から出る視線の先端が対象に接するのであるから、この文の eyes という表現は、眼球のみならず視線まで含むように、その指示対象が拡張されていると考えることができる。<sup>2</sup>

他の前置詞の場合にも、目が物に触れることは物に注目することを表わす。over を用いた (2a) は接触した状態での移動と解釈することができるので、(2b) も同様に目の接触移動が表現されていると考えられる。<sup>3</sup> また、off を用いた (3a) は肘が食卓から離れること（つまり接触状態の終了）を表わし、(3b) も同様に目が対象から離れることを表わしている。言うまでもなく、目の接触が終わることは、注目しなくなることで解釈される。

## (2) a. ...he travelled all over Europe... WB

## b. He let his eyes travel over its long line of stores. WB

## (3) a. Take your elbows off the table, children! LDPV

## b. If you take your eyes off the children, they go wild! LDPV

以上の例は、見る事が、対象への目の接触として概念化されることを示している。ただし注意すべきことは、ここで問題にしている「見る」ことは、視線を向けることに限られているということである。日本語の「見る」は意味範囲が広いので、「横目で見る」「新聞を見る」「子供の面倒を見る」などのように、視線を向けることから、対象を知覚し理解し、さらには適切に対応することにまで広がっている。<sup>4</sup> しかし、見ることを目の接触によって概念化することは、厳密に言えば視線を向けることに限られていて、知覚することは含まれていない。確かに、物に目を向ければ、それを知覚することにつながる。したがって、多くの場合、この二つを分離して考えることはできず、ある人物が対象に視線を向けることは、その人物が知覚することを含意する。実際、上で見た例は、いずれも知覚を含意しているように思われる。しかしながら、この含意は明示的表現によって打ち消すことができる。次の例では、人物の目が対象に接触しているにもかかわらず、幻以外は何も知覚していない様子が描かれている。

(4) With her chin propped on her hands and her eyes fixed on the blue glimpse of the Lake of Shining Waters that the west window afforded, she was far away in a gorgeous dreamland, hearing and seeing nothing save her own wonderful visions. (LM111)

目の接触の表現は、物に視線を向ける動作は表わしているけれども、厳密には知覚が起きていることまでは表わしていないことを、この例は示している。

なお、英語の動詞の場合には、動作と知覚に関するこのような区別は、look と see によってなされていることは周知のことである。すなわち、目を向ける動作を look が表わし、対象の知覚を see が表わしている。次の例文からは、look と see のこの使い分けを読み取ることができる。<sup>5</sup>

## (5) a. If you look carefully you can just see the church from here. OALD5

## b. Look to see whether the road is clear before you cross. OALD5

以上、目を向けること (look) と知覚すること (see) の区別を行ない、厳密には前者のみが目の接触という表現によって捉えられると述べてきた。ここまで来ると、Lakoff and Johnson (1999: 398) の言う〈見ることは触ること (Seeing Is Touching)〉というメタファーを避けて通ることはできなくなる。彼らは、このメタファーに手短に触れているだけであるが、そこから推察すると、seeing という知覚を表わす言葉を使っているにもかかわらず、目を向ける動作と知覚の両面をこの〈見ることは触ること〉という一つのメタファーによって統一して扱おうと考えているようである。このメタファーによって、手 (limbs) をのばして対象に触る動作が物理的領域から視覚的領域に写像され、見ることが触ることとして概念化されているという。手が目に対応し、手で物に触ることが、目を通じて物を知覚することに対応するという。これによって理解できる例として (6) が挙げられ、手と目の対応を示す例として (7) が挙げられている。<sup>6</sup>

- (6) a. Her eyes picked out every flaw in the carpet.  
 b. She undressed him with her eyes.  
 c. Our eyes met across the room.  
 (7) a. She ran her fingers over the carpet.  
 b. She ran her eyes over the carpet.

しかしながら、(6) と (7) を統一して扱うことには疑問が残る。これらが、物理領域から視覚領域への写像の存在を示していると考えする必要はない。特に (7) の例は、上の (1)-(3) と同様の組み合わせであり、eyes が視線を含むように拡張されて、物理的接触の一種を表わしていると考えれば十分である。(7b) では eyes の参与者役割は主題 (具体的には移動者 (mover)) であり、知覚の主体 (経験者) ではない。つまり、(7b) の解釈には、接触の概念は必要であるが、手で触れて知覚する経験者は存在しない。(7b) は、(7a) と同じく、人の動作を外側から眺めて記述した表現であり、その人物が何かを知覚したという解釈が生じるとすれば、それは現実世界の知識に依存した推論による。したがって、(7b) の解釈には、知覚の領域は不要である。それとは対照的に、(6a-b) の解釈には、ある種のメタファーが関わっている。動詞 pick out と undress は、次の例のように基本的には物理的領域における変化を表わしている。しかも、その変化は典型的には手を使うことによってもたらされる。

- (8) a. The child refuses to eat this fruit without first picking out the stones. LDPV  
 b. She undressed the child before putting her in the tin bath. COBUILD2

しかし、(6a-b) のように her eyes が動作主または道具として、これらの動詞に結びつくと、目には手のように物を動かす力がないという常識を信じる者にとって、物理的領域での解釈が不可能となり、心理的領域での解釈を取らざるをえなくなる。したがって、ここでは領域から領域への写像が起きることになる。(6c) に関しては、(7b) と同様に、視線にまで拡張した目が物理的に接触する出来事と考えてよいであろう。以上の説明で明かなことは、これらの事例は、一つのメタファーによって扱うのではなく、少なくとも二種類の現象として分けて扱うべきことである。すなわち、一方は物理領域から心理領域へのメタファーであり、他方は物理領域内での眼球から視線への拡張、すなわちメトニミーである。

さて、ここで目のメトニミー的接触に関して、英語と日本語を比べよう。上で確かめたように英語では、対象に注目することを、物に目を接触させることとして表現できる。それでは、日本語で

も同じような概念化がなされているのであろうか。日本語で頻繁に用いられる慣用表現に、「目をつける」「目を据える」「目を離す」がある。このような表現が存在することは、日本語でも、注目することが目の接触であると認識されていることを示している。

- (9) a. …足が速い一人の選手に目をつけた。  
 b. 遠い尾根にじっと目を据えたまま、彼は砂の上を進んだ。  
 c. …持ち主が荷物や鞆から目を離した僅かな隙を狙う…。

動詞「つける」「据える」「離す」は、「顔を水面につける」「望遠鏡を屋根に据える」「さかなの骨から身を離す」のように物理的な接触または分離を表わすので、その目的語に「目」をとる場合には、「目」が眼球から視線の先端まで拡張して、対象に物理的に接触するように概念化されると考えてよいであろう。

英語でも日本語でも、注目することが目の接触として表現されることは、翻訳された文章を照らし合わせることによって、ある程度確かめることができる。英語から日本語への翻訳を調べてみると、一方のみが目の接触として表現されていることもあるが、次ぎの例のように、両方とも目の接触となっている場合もある。

- (10) a. ...and the boys fixed their eyes on the goal of their hopes and bent to their work to win it. (MT72)  
 b. 二人は、めざす目的地に目をすえ、そこへ到達することだけを考えていた。(大102)  
 (11) a. ...I saw that he could not hardly take his eyes off her. (WM68)  
 b. …事実一刻も妻君から眼を離せないらしかった。(中野111)

上の2例は他動詞の場合であるが、次ぎの例では自動詞が用いられている。

- (12) a. From one to another the child's eyes darted, eager and wistful. At last they lingered on one away to the left, far back from the road,... (LM22)  
 b. こどもの目はそれからあれへと、熱心に、なつかしげにはしたが、ついに左手の、道からずっとひっこんだ一軒の家にとまった。(村35)  
 (13) a. Her eyes dwelt affectionately on Green Gables,... (LM214)  
 b. マリラの目は…わが家の青い屋根の上に、いとおしそうにとまった。(村306)

ここまで述べてきたことを要約しよう。物を見ることは、対象に目を向けて注目することと、対象を知覚することに大まか分けることができる。そのうち、注目することは、名詞 eye を用いて表現すると、目が対象に接触することとして概念化される。その際、目は視線の先端まで含むように拡張され、物が空間を移動する場合と同じように動き回って、対象に接したり離れたりする。目が対象に接することが注目することであり、目が対象から離れると注目が終わる。さらに、このように物に注目することは物に目を接触させることである」という概念化は、英語でも日本語でもなされている。

### 3. 物が目に触れる

さて次に、物を見ることの第二の側面、すなわち目で知覚する場合について考えよう。目を通し

て物を知覚することを表わすとき、日本語には、物が「目に入る」「目に映る」「目に付く」の表現がある。

- (14) a. …一人の少女の姿が眼に入った。  
 b. …目に映ったのは大きな大きな入道雲であった。  
 c. やたらに食物店ばかりが眼につく。

ここで用いられている動詞「入る」「映る」「付く」は、基本的には「人が部屋に入る」「山が水面に映る」「鉄が磁石に付く」のように物理的領域において移動者が到着点に移動することを表わしている（ただし、「映る」の場合には物ではなく像が移動する）。(14)のように、これらの動詞が到着点として「目」ととると、「見える」と同様に視覚的解釈を受ける。実際、「一人の少女の姿が眼に入った」という代わりに「一人の少女の姿が見えた」と言っても同じことを表わすことができる。すなわち、日本語では、物が移動して目に到着することは、その物が見えることとして解釈される。

興味深いことに、英語では、このような表現は用いられないようである。目が到着点となる表現が視覚的解釈を受ける例が、英語では見つからないからである。英語から日本語への翻訳、また逆に日本語から英語への翻訳を照らし合わせてみると、目への到着によって視覚的知覚を表わすことを英語では避けていることが明らかになる。次に示す英語から日本語への翻訳では、「目に入る」「目に映る」「目に付く」に対応する元の表現は、知覚動詞 see, perceive である。

- (15) a. But Anne did not see Josie,.... (LM273)  
 b. しかし、アンにはジョシーが目にはいらなかった。(村387)
- (16) a. For a moment I hesitated to strike a light. I dimly perceived a bed in the corner,.... (WM89)  
 b. 僕は、ちょっと灯りを点けるのを躊躇した。部屋の隅に、ベッドが一つ、ぼんやり眼に映った。(中野146)
- (17) a. Tom was about to take refuge in a lie, when he saw two long tails of yellow hair hanging down a back.... (MT50)  
 b. トムは、嘘をついて逃げるつもりだったが、そのとき、金髪を二つに分けて長く垂らした背中が目についた。(大71)

次ぎの日本語から英語への翻訳でも、英語では知覚を表わす spot, notice が使われている。

- (18) a. In the shade of a pine tree, I spotted a yellow-robed monk praying. (S13)  
 b. 松の木かげで合掌している一人の黄衣の僧が眼に入った。(開22)
- (19) a. Entering the main gate, he noticed first of all the twin rows of ginkgo trees.... (R51)  
 b. 正門を這入ると、…銀杏の並木が眼に付いた。(夏38)
- (20) a. Sanshiro was pleased that the man had noticed the dark spot on his cap. (R22)  
 b. 三四郎は、被っている古帽子の徽章の痕が、この男の眼に映ったのを嬉しく感じた。(夏18)

また、次の例では、英語の fall on/upon が日本語の「目に付く」「目に映る」に対応してる。英語では目が移動して対象に接触する表現が、日本語では逆に対象が移動して目に接触することとして表

現されている。つまり、目は、英語では移動者、日本語では到着点となっている。

- (21) a. We entered the room, and my eyes fell at once on the picture. (WM211)  
 b. 部屋へ入った。問題の絵はすぐ眼についた。(中野352)
- (22) a. Now Tom shivered from head to heel; for his eye fell upon the stolid face of Injun Joe. (MT80)  
 b. トムは頭のさきから足の爪さきまで震えあがった。というのは、そのときインジャン・ジョーのなにくわぬ顔が目に映ったからだ。(大113)

さらに、日本語から英語へ翻訳する際、「目に入る」「目に付く」を catch/strike someone's eye とすることもある。日本語では、到着点である目が、英語に翻訳されて、catch, strike の表わす行為の対象すなわち被動者 (patient) に姿を変えている。

- (23) a. The color of her obi caught his eye now for the first time. (R10)  
 b. この時女の帯の色が始めて三四郎の眼に這入った。(夏9)
- (24) a. The first thing that had struck Shimamura's eye as he got off the train was that array of silver-white. (S75)  
 b. 島村が汽車から降りて真先に目についたのは、この山の白い花だった。(川75)

以上の例群は、英語では物が目に移動する表現によって知覚を表わすことがないことを示唆している。

英語でも、もちろん、次のように into one's eyes によって目が到着点であることを明示することはできるが、いずれの文も物の知覚は表わしていない。目の中に入るのは、上から順に、コンタクトレンズ、光、涙、感情である。

- (25) a. ...she began to insert contact lenses into her eyes. WB  
 b. ...the light shone directly into Mark's eyes, blinding him instead. WB  
 c. She bit her lips and tears came into her eyes. WB  
 d. Into his eyes are concentrated all his feelings and they are essentially cold and suspicious, the stare in reptilian. WB

このうち、問題になりそうな例は (25b) であろう。光が目に入ればその光を知覚することになるので、目への移動が知覚を表わす例と考えることもできる。しかし、日本語で起きていることは、(18b) 「…一人の黄衣の僧が眼に入った。」のように実際には目の中に移動してこないものが移動していると表現し、その表現に知覚の解釈を与えることである。それに対して、英語の (25b) では実際に光が目に入ることが文字通りに描かれている。知覚が起きていることは、光が実際に目に入ることから推測されることである。(25)の例は、いずれも、ある人物を他者の目を通して描いたものである。描かれた人物の目の中に入るものは他者が観察したものであり、本人が知覚したものではない。このことは、目が移動者の到着点のときばかりではなく、次のように移動の概念を伴わない場合にも当てはまる。

- (26) a. She turned to me again, amusement in her eyes. WB

## b. Muriel had tears in her eyes.... WB

ここまでで確かめたことは、日本語では物が目に移動するという表現を、物が見えることとして解釈するのに対して、英語では、そのような表現は、文字通りに移動することを表わすだけであり、目を通した知覚としては解釈しないということである。

## 4. 語順が決める解釈

先のふたつの節で観察したことを要約してみよう。物を目で見ることは、物と目の空間的關係として表わすことができる。その中でも、物に注目することは、目で物に触れることとして表現できる。その際、「目」あるいはeyeという語の指示対象は、目そのものから視線の先端にまで拡張して解釈される。このことは、英語にも日本語にもあてはまり、その平行性は、次のように例示できる。

- (27) a. The boy fixed his eyes on the bag.  
b. 少年はバッグに目を付けた。

ところが、見ることの知覚的側面になると、英語と日本語の平行性は成り立たなくなる。日本語では、物が移動して目に到着するという表現をすると、その表現が目からの知覚として解釈される。しかし、英語ではそのような解釈は成立しない。たとえば、英語では、(28a)の形式の文で知覚を表わすことはないようである。それに対して、日本語の例(28b)には、視覚的解釈が可能である。ただし、「目に入る」には、「土埃が少年の目に入った」のように物理的移動の解釈もありうる。

- (28) a. The bag got into the boy's eyes.  
b. バッグが少年の目に入った。

要するに、注目の空間化は両言語で可能であるのに対して、知覚の空間化は日本語に限られている。英語と日本語の間に、なぜこのような相違が生じるのであろうか。この問題には、語の意味解釈の順序が関わっていると思われるので、以下では、語順と語の意味解釈による説明を試みることにする。

語順を用いて、日本語と英語の表現の相違に説明を与えるためには、語順が意味解釈に関与することが前提となる。そこで、次ぎのように仮定する。言葉の意味解釈は、その言葉が表現されるのと同時に行なわれる。その結果、複数の語が時間順に心の中に表示されると、その順に語の解釈が行なわれることになる。このことを、解釈確定順序の仮説と呼ぶ。<sup>7</sup>

## (29) 解釈確定順序の仮説

語の意味は、心の中に表示される順に解釈が確定する。

これによれば、ある語が表示されて解釈が確定した後、次ぎの語が表示されてその解釈が確定する。一貫性のある解釈を得るためには、後から表示される語の解釈は、既に確定した解釈に矛盾のないように行なわれるから、先の語の影響によって当然その基本的な意味から隔たった解釈を受けやすいことが予想される。

「目」とeyeの解釈は、注目の場合と知覚の場合では異なっている。第2節で記したように、注目を表わすときには、「目」とeyeはメトニミーによる解釈を受け、眼球から視線へと意味が拡張して

いる。目の指示対象が視線の先端まで広がるので、目が対象に接触することになる。表現全体としては、物理的領域における出来事を表わしている。上の (27a) の英語と (27b) の日本語では、動詞とその補部の解釈の順序は異なるが、いずれも物理的接触の解釈を受ける。

それでは、(28) の知覚を表わす「目」(eye) の解釈では何が起きているのであろうか。(28b) の日本語には、メタファーによる解釈が起きていると考えられる。「バッグが少年の目に入った」を知覚として解釈するとき、バッグが物理的に移動することはない。したがって、この移動は、物理的領域から知覚の領域へ写像されて、知覚領域の中だけで成立している。その際、写像を引き起こすのが「目」である。「バッグが少年の」までは物理的領域の解釈を受けるけれども、次に「目」が〈目による知覚〉として解釈され、その通路を経て、それまで物理的であった解釈が知覚の領域に持ち込まれる。そして、最後の「に入った」も、「目」の解釈と整合するように知覚の領域での出来事として解釈される。

英語の場合には、(28a) の *The bag got into the boy's eyes.* のような、物が目に移動するという表現が知覚を表わすために用いられることはない。これは、*The bag got into* の部分が物理的移動として先に解釈されるので、*the boy's eyes* もそれに合わせて物理的に解釈せざるをえないということに起因していると考えられる。*eyes* が表現された段階では、既に動詞の解釈は物理的領域に割り振られている。たとえ、後から表示された *eyes* に〈目による知覚〉の解釈を与えたとしても、解釈確定順序の原則があるので、動詞に戻って視覚的解釈を与え直すことはできない。そのままでは、物理的解釈と知覚的解釈の入り混じった奇妙な意味になるので、現実世界に関する知識に基づいてこの解釈は捨てられることになる。

以上、「目」と *eye* による表現の共通点と相違点を、視覚表現に限って明らかにし、それらを語順という観点から考察した。今後の課題としては、以上の結果を、すでに行なった「姿」と「心」に関する考察結果<sup>8</sup>と照合しながら、語順と概念化の問題を考える作業が残されている。おそらく、何らかの一般性を見出すためには、まだ資料が不十分であると思われるので、今後、個別の事例を丁寧に記述する作業をさらに続ける必要がある。

## 注

- 1 主題 (theme) と場所 (location) は、Langacker (1991: 282-293, 2000: 27-34) の用語である。主題 (theme) は、より具象的な役割としては、被動者 (patient)、経験者 (experiencer)、移動者 (mover)、ゼロ (zero)、として実現する。それぞれの例は、*They melted. I itch. It rose. She is tall.* である (Langacker (2000: 30))。
- 2 視線 (line of sight) については、Talmy (2000: 116) が動詞 *look* を例にして説明している。Talmy によれば、視線は、経験者から出て、ある経路をたどり、対象に到達する線として概念化されている。このことは、(i) のように経路と到着点の表現を用いて示すことができる。(ii) は経験者が、視線の到着点とはならないことを示すための例である。
  - (i) *I looked into/toward/past/away from the valley.*
  - (ii) *\*I looked out of the valley (into my eyes).*  
 <where I am located outside the valley>

ただし、視線は、経験者から出ると言うよりは、目から出るとする方が正確である。

- 3 *over* の意味に関しては、Tyler and Evans (2001) の詳しい考察が興味深い。彼らは、*over* の原場

面 (protoscene) を、物が場所に接触可能な範囲にあることと言う。つまり、over が表わす関係とは、物が場所に接触していなくてもよいが、両者が互いに影響し合う範囲にあることである。接触は、この抽象的な意味に当てはまる具体例の一つということになる。

- 4 「見る」の意味分析については、嶋田 (2001) を参照。
- 5 look と see の意味分析についても、嶋田 (2001) を参照。
- 6 なお、〈見ることは触ること〉というメタファーの事例は、すでに Lakoff and Johnson (1980: 50) でも挙げている。
- 7 解釈確定順序、および、それに関連する文の理解については、嶋田 (2000, 2001, 2002a) を参照。
- 8 「姿」と「心」については、嶋田(2000, 2002b)で記述した。

#### 参考文献

- Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live By*, The University of Chicago Press, Chicago.
- Lakoff, George and Mark Johnson (1999) *Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and its Challenge to the Western Thought*, Basic Books, New York.
- Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar Volume II Descriptive Application*, Stanford University Press, Stanford.
- Langacker, Ronald W. (2000) *Grammar and Conceptualization*, Mouton de Gruyter, Berlin.
- 嶋田裕司 (2000) 「『姿』の出没——日本語と英語の視覚動詞の補部——」『群馬県立女子大学英語英米文学研究』第2号 11-23。
- 嶋田裕司 (2001) 「語順と語の多義性」『群馬県立女子大学紀要』第22号 (25)-(38)。
- 嶋田裕司 (2002a) 「日本語と英語の知覚動詞：理解の過程が語の意味に与える影響」『群馬県立女子大学紀要』第23号 (13)-(24)。
- 嶋田裕司 (2002b) 「心を動かす——日本語と英語の心理的メタファー——」『群馬県立女子大学英語英米文学研究』第4号 27-43。
- Talmy, Leonard (2000) *Toward a Cognitive Semantics Volume I: Concept Structuring Systems*, The MIT Press, Cambridge MA.
- Tyler, Andrea and Vyvyan Evans (2001) “Reconsidering Prepositional Polysemy Networks: the Case of *over*,” *Language* 77-4, 724-765.
- COBUILD2= *Collins COBUILD English Dictionary* (1995) HarperCollins Publishers.
- LDCE3= *Longman Dictionary of Contemporary English, Third Edition* (1995) Longman Group Ltd.
- LDPV= *Longman Dictionary of Phrasal Verbs* (1983) Longman Group Limited.
- OALD5= *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English, Fifth Edition* (1995) Oxford University Press.
- ODCI= *Oxford Dictionary of Current Idiomatic English Volume: 1 Verbs with Prepositions & Particles* (1975) Oxford University Press.
- WB= Word Bank, *COBUILD on CD-ROM* (1995) HarperCollins Publishers Ltd.

## 用例出典

( ) は本文で言及する際の略号を示す。西暦は作品の初出年ではなく、使用した版の出版年を表わす。

(WM) W. Somerset Maugham (1944) *The Moon and Sixpence*, Penguin Books.

(中野) 中野好夫 (訳) (1959) モーム『月と六ペンス』新潮文庫。

(LM) Lucy Maud Montgomery (1992) *Anne of Green Gables*, Bantam Books.

(村) 村岡花子 (訳) (1954) モンゴメリ『赤毛のアン』新潮文庫。

(MT) Mark Twain (1986) *The Adventures of Tom Sawyer*, Penguin Books.

(大) 大久保康雄 (訳) (1953) マーク・トウェイン『トム・ソーヤーの冒険』新潮文庫。

(開) 開高 健 (1982) 『輝ける闇』新潮文庫。

(CS) Cecilia Segawa Seigle (tr.) (1980) Takeshi Kaiko *Into a Black Sun*, Kodansha International.

(川) 川端康成 (1987) 『雪国』新潮文庫。

(ES) Edward G. Seidensticker (tr.) (1957) Yasunari Kawabata *Snow Country*, Charles E. Tuttle Company.

(夏) 夏目漱石 (1990) 『三四郎』岩波文庫。

(JR) Jay Rubin (tr.) (1990) Natsume Soseki *Sanshiro*, Kodansha English Library, Kodansha International.